茨城新聞

2016年(平成28年)10月2日　日曜日

戦後史の貴重な証言録

日本の進路を決めた10年 増補改訂版

バズル・エントウィッスル著、藤田幸久訳

本書は戦後の混乱期、MRA（Moral Re-Armament 道徳再武装）の日本駐在代表として日本の国際社会復帰に尽力した著者、バズル・エントウィッスル氏（1911～2007年）による在日体験記である。

1990年に出版された同名の著書の増補改訂版。訳者の参議院議員、藤田幸久氏は「国難に党派を超えて取り組んだ指導者たちの実録であり、あらためて世に伝えたいと感じた」と刊行を決意した理由を記している。

MRAは米国のフランク・ブックマン博士が提唱した平和運動のネットワーク。「軍備の再武装よりも道義と精神の再武装こそが平和への道」という理念に基づく。

著者はMRA運動に関わり、50年、日本の指導者に招かれ、仲間と共に来日した。道徳的な資質を重要と考えた政・財界、労働界などの指導者層らと交わり、共に行動する機会に恵まれた。

当時の日本には、保守と革新、労と使といった対立する立場を代表するグループ間に共通の基盤がなかった。著者らは、双方のギャップを埋める最善の方策は交流の場づくりだと考えた。

本書では、著者らの橋渡しにより、対立関係にある人たちの間に信頼が築かれ、党派を超えた友情関係が形作られていく過程が豊富なエピソードと共に語られる。

このほか、韓国代表と日本代表の和解の場をつくったフィリピン・バギオでの国民外交の模様や、岸信介首相の東南アジア歴訪を巡る社会党の加藤シヅエ議員らの進言などが克明に描かれ、戦後史を顧みる上で貴重な証言録となっている。

訳者が指摘する通り、中国、韓国、北朝鮮、ロシアとの関係がいまだに波高しという現実がある。内戦やテロが相次ぎ、洋の東西で排外主義やポピュリズムが台頭している。こうした折、本書が再び刊行された意義は大きい。歴史の表舞台には登場しない、本書の主人公たちの献身的な働きは、この国と隣国の信頼関係を再構築する上で示唆に富んでいる。（菊池克幸・本紙編集局長）（ジャパンタイムズ・1512円）